

占領期新興新聞資料の価値と可能性

ニュースパーク（日本新聞博物館） 工藤 路江

はじめに

ニュースパーク（日本新聞博物館）は、運営母体である一般社団法人日本新聞協会が1948年から収集・整理してきた協会加盟紙・非加盟紙の製本資料（以下、合本）を、収蔵庫で保管している（図1）。これまで企画展や出版物などで利用する機会はあったものの、学術的な調査研究での活用は進んでいなかった。しかしここ数年、大学の研究者などから閲覧・調査の要望が相次ぎ、研究成果の報告が増えてきた。また、外部からの問い合わせ対応を行うなかで、他の機関では所蔵されていない銘柄の新聞が多く含まれていることや、連続する期間の紙面が製本化されていることによる閲覧の利便性の高さなど、合本資料群の価値を再認識するに至った。さらに、2000年に開館した日本新聞博物館の資料収集作業に伴い、新聞コレクターからの購入や一般からの寄贈などで収集した占領期の新興新聞もあり、合本と組み合わせることで、より充実した資料構成となった。

そこで本稿において、所蔵する占領期新興新聞資料について、企画展示や出版物での活用、研究者の調査への協力など過去の事例を基に、その価値を見出し、今後のさまざまな研究利用の可能性を考えてみたい。



図1 鴨居収蔵庫の合本。

1. 日本新聞協会による新興紙収集と製本作業 戦後新興紙とは

太平洋戦争が終わり、日本が連合国の統治下に置かれた「占領期」に入ると、全国各地でさまざまな新聞が誕生した。戦中から戦後、新聞用紙は政府の監督下で割当統制されていた。1945年10月、GHQは割当を民主化するため、新たな用紙割当機関の創設を日本政府に要請¹、同年11月に新聞及出版用紙割当委員会が設置された。以後、翌年10月までに新たに用紙割当を認められた新聞社は180に上っている。GHQは戦時中に世論の指導的役割を果たした既存紙を警戒しており、割当委員会はGHQの意向を受けていたため、新興紙を優遇する用紙割当が実施された。新興紙を育成し、地方自治や民主化を推進しようというねらいがあったとする見方もある²。メディア史を専門とする立教大教授の井川充雄氏は新興紙について、①戦時下の新聞統合で廃刊もしくは吸収された新聞の題号を継承した「復刊」という形のものの、②既存紙が人員の派遣や資金援助をした「協力紙」や、別の題号で発行した「夕刊代替紙」、③既存紙とは関係がないもの、の3つに類型化している³。敗戦後、ニュースと活字に飢えた人々からの需要もあり、新聞は「出せば売れる」という状況であった。しかし、新興紙は設備や人材が乏しく、他社に印刷を依存しているケースも多かったため、最新ニュースの掲載が遅れるなど、さまざまな問題を抱えていた。そうした中、1949年11月から全国紙や地方紙の一部が統制外のセンカ紙を使い夕刊発行を開始するなど、既存紙の攻勢も本格化する⁴。やがて戦後復興が進み、用紙事情が改善されると、1951年5月には用紙割当制度が廃止され、新聞販売の自由競争が始まる。戦前から続く既存紙が多く読者を獲得し、旋風を巻き起こした新興紙は一部を除き姿を消した。

合本収集の経緯と期間

1946年7月に設立された日本新聞協会は、1948年1月から協会加盟社、非加盟社の新聞の収集・保存を開始、製本済みの新聞原紙を保存するため、1972年に横浜市内に資料分室を建設した⁵。スペースに限りがあることから、1996年に分室を博物館の収蔵庫として建て直す際に、マイクロフィルム化されていない協会加盟紙のみ原紙の保存作業を継続することになった⁶。これまで保存してきた原紙は、マイクロフィルム化されているものは処分し、されていないものは保存を継続した（現在、原紙の包括的な収集は中止）。さらに、2007年度に合本製作を中止し、一部の合本については新聞社や公共図書館への寄贈または処分を行った。2008年4月時点での合本の所蔵は約680タイトル、約4000点となっている。現在は日本新聞協会の機関紙「新聞協会報」の合本が毎年1冊収納されている。この結果、日本新聞協会非加盟で、マイクロフィルム化されなかった戦後新興紙は合本の形で保存が続けられてきた。

資料の価値（他館での所蔵状況など）

先述の通り、占領期新興紙はその多くが数年で消滅し「幻の新聞」となった。所蔵機関が少ないうえに一般公開している機関は限られるため、当館においては貴重資料として扱う。

当館が所蔵する新興紙では類型②に該当する「夕刊とうほく」（河北新報）、「夕刊信州」（信濃毎日新聞）、「夕刊ニヒガタ」（新潟日報）、「夕刊ひろしま」（中国新聞）など、地方紙が発行した夕刊紙が多い。また、北海道新聞が発行した週刊紙「北海道ウイークリー」（1946年12月創刊）や、全国紙が用紙統制外のセンカ紙で発行した夕刊紙もある。用紙事情の改善により、各社が朝夕刊セット制を復活すると、こうした別建て夕刊紙の多くはそちらに統合された。既存紙との関係がない独立系の新聞（類型③）としては同盟通信出身の松本重治が創刊した「民報」や、同じく同盟出身の岡村二一らが創刊した「東京タイムズ」などが所蔵されている。戦前の通信社に勤務した人物が、相次いで新聞を創刊したことは興味深い。また、後述する「新夕刊」の所蔵も多いが、戦前に発行されていた「やまと新聞」を復刊・改題する形で創刊されたため、類型①として分類する。

こうした新興紙について、原紙での保存は国立

国会図書館、東京大学、同志社大学などで確認できる。また、一部がマイクロフィルム化され国立国会図書館などにも所蔵されている。他館では欠号が多い新聞でも、当館においてある程度まとまった形で保存されているのは、先述の通り、新聞協会加盟社、非加盟社の新聞を継続的に収集・保存してきたからである。外部の研究者から問い合わせがある際には「他機関になかったため問い合わせた」というケースが多い。例えば先述の「北海道ウイークリー」は、国立国会図書館、北海道立文学館などに所蔵があるものの、148～170号の間でいくつかの欠号があり、当館の合本（136～170号収録）で欠号を補うことができる。

2. これまでの保存と活用

日本新聞博物館での保存

日本新聞協会は1998年、新聞博物館の運営を担う財団法人日本新聞教育文化財団（2011年に新聞協会が吸収合併）を設立し、2000年10月に日本新聞博物館が開館した。新聞・ジャーナリズムの歴史を継承すべく、会員新聞社や個人から新聞編集・製作などに関わる資料を収集してきた。新聞協会が戦後から収集・製本・保存してきた合本は、博物館に併設された図書室・新聞ライブラリーの資料となった。同施設は2016年の博物館リニューアルに伴い、2015年に閉鎖となり、新興紙はそのまま博物館の資料として所蔵されることになった。紆余曲折を経ているが、その間に保存場所についての変更はなく、先述の分室（収蔵庫）において保管を継続している。

ゆまに書房『占領期新興新聞集成』への協力（2006～07年）

当館の新興紙に、早くに光を当てたのはゆまに書房の『占領期新興新聞集成』の刊行である。メディア史研究者・有山輝雄氏（当時・東京経済大学教授）と、井川充雄氏の監修により、ゆまに書房から2006年に『日本新聞博物館所蔵 占領期新興新聞集成 九州・沖縄編』、07年に『日本新聞博物館所蔵 占領期新興新聞集成 近畿編』が出版された。前者は「九州タイムズ」「長崎民友」「新島原」など、後者は「大阪時事新報」「京都日日新聞」「熊野新聞」などを各12枚のDVDに収録した復刻集成である。同社ウェブサイトの商品紹介のページには、有山氏が「戦後新興紙は、ほとん

どの図書館等で体系的に保存されておらず、利用しにくかった。今回の復刻によって格段に利用しやすくなり、研究に寄与するところは非常に大きい⁷というコメントを寄せている。

日本新聞博物館企画展での活用

当館の企画展において、占領期新興紙を活用している一例を紹介する。

① 「幻の新聞展—戦後生まれて、やがて消えていった新興紙—」2001年度

日本新聞協会が合本で保存していた約40紙の新興紙とそれらの創刊号・休刊号の一部を公開した。創刊号・休刊号については、当博物館が収集家・羽島知之氏から購入したものが中心となっており、写真新聞の先駆けとなった「サン写真新聞」や編集綱領に「平易に明るく家庭中心に」を掲げた「第一新聞」の創刊号、「新夕刊」の創刊予告号などを展示した。「新夕刊」は1946年1月に東京で創刊。編集を担当した林房雄が連載小説を掲載、横山隆一、田河水泡、清水崑らが漫画を担当し、充実した文芸欄を誇っていた。

② 「新聞漫画の眼—人 政治 社会—」2003年度

新聞に風刺画「ポンチ」が登場した江戸時代末から130年にわたる新聞漫画の歴史をたどった展示。新聞漫画が、どのように人や政治・社会を捉え表現してきたのか、時代背景や世相との関係性にも触れた。この企画展では「夕刊フクニチ」「新夕刊」「夕刊朝日新聞」などの占領期の各新聞に連載された長谷川町子の「サザエさん」や、「新夕刊」「夕刊とうほく」に掲載された横山隆一の漫画を紹介した。

上記のように、出版や展示での活用事例はあるものの、合本収録期間に限れば欠号が少ないという特徴を生かす調査や研究が進んでいないのが現状である。

3. 本資料群のもつ可能性

外部研究者による「新夕刊」を活用した調査・研究の事例

当館の新興紙資料に別の角度から光を当てたのが、文学の研究者である。大阪大学大学院人文科学研究科教授・斎藤理生氏からの要望を受け、「新夕刊」の調査に対応した。斎藤氏は当館が所蔵する1946年5月以降の紙面を閲覧し、その中から坂口安吾と三島由紀夫の随筆を発見。いずれも『坂

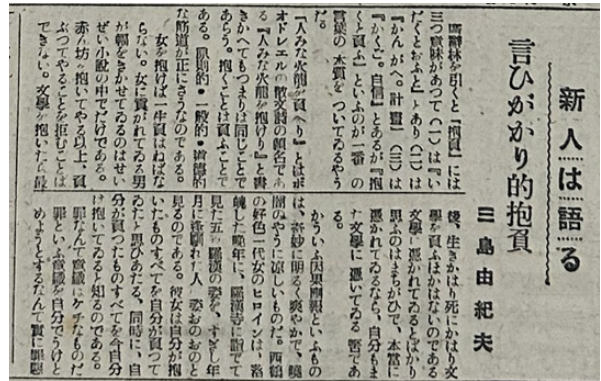


図2 三島由紀夫「言ひがかり的抱負」。

口安吾全集』『決定版三島由紀夫全集』に未収録の資料であることを発表した⁸。中でも「新夕刊」の1947年6月29日付に掲載された三島由紀夫の随筆「言ひがかり的抱負」（図2）は、新発見資料として全国紙や文芸誌などで取り上げられた⁹。

斎藤氏が当館を訪れるきっかけとなったのが、小津安二郎研究者の平山周吉氏の著作『小津安二郎』（新潮社、2023年）に記述があった、「新夕刊」の小津の寄稿の引用文である。これにより同紙が当館に所蔵されていることを知ったという。平山氏も当館の所蔵資料を調査した研究者である。斎藤氏が同紙の所蔵機関を調査したところ、国立国会図書館では創刊直後や1948年以降の紙面は所蔵されているが、46年6月から47年末までの紙面は断片的な所蔵になっているという¹⁰。「新夕刊」については、ほかの研究者からも「国会図書館になかったため」という理由で所蔵問い合わせや閲覧の依頼を受けた。

今後の調査・活用の展望

斎藤氏をはじめとする文学の研究者から「新夕刊」の問い合わせが相次いだ理由として、小林秀雄、亀井勝一郎、林芙美子、菊池寛、石川達三など、著名な作家や文化人たちの寄稿が多く掲載されていることが挙げられる¹¹。「新夕刊」は編集綱領に「正確なるニュース」「公正なる解説」を掲げているが、「穏健にして明朗なる娯楽」の提供も明示し、文芸記事に力を入れていた。

1945年12月に「民報」を創刊した松本重治はインタビューにおいて「一般的にほんとうに民主主義、日本の民主主義化という問題に役立つような新聞をひとつやろうじゃないか」¹²という考えが発刊の意図にあったことを語っているが、「ほん

うに」という言葉から、民主主義を発展させる担い手は自分たちであるという、既存紙への対抗意識が窺える。「民報」は社説で、東京裁判の意義は「日本の過去の生き方」が徹底的に裁かれることにあり、そのことが民主化に繋がると説く¹³。同紙は戦前からの日本の政治の問題点と責任の所在を明確化し、今後の政治改革について紙上で提起していた¹⁴。また、占領期という特異な時期は、戦時体制・軍国主義の崩壊を受け、日本の新聞が新たなジャーナリズムの形を模索する時期でもあった。個人的には「再生」と「民主化」におけるメディアの歴史をたどる資料になるのではないかと感じている。

占領期の新聞は記事や広告、小説、漫画に至るまで、当時の社会・世相が垣間見える資料であり、今後も文学、歴史学、社会学など、さまざまな分野の研究者による「新発見」が期待される。1948年の「大阪タイムス」（1946年創刊、のちに「スポーツニッポン」に合併）には化粧水、マニキュア、香水といった美容品や、宝石店、呉服店、温泉旅館、高峰三枝子主演の映画などの広告が掲載されている。終戦から3年経ち、人々の日常・娯楽が戻りつつあることを感じさせる。広告を眺めるだけでも当時の空気感が伝わるのが興味深い。現在、研究機関に所属する研究者や学芸員については閲覧・調査を受け付けているため、お気軽にご相談いただきたいと思います。

註

- 1 井川充雄著『戦後新興紙とGHQ—新聞用紙をめぐる攻防』世界思想社、2008年、P28
- 2 同書、P61
- 3 同書、P61
- 4 春原昭彦著『四訂版 日本新聞通史』新泉社、2007年、P247
- 5 日本新聞協会編『日本新聞協会四十年史』社団法人日本新聞協会、1986年、P469
- 6 日本新聞協会編『日本新聞協会五十年史』社団法人日本新聞協会、1996年、P611
- 7 ゆまに書房公式HP「日本新聞博物館所蔵 占領期新興新聞集成 九州・沖縄編」
<https://www.yumani.co.jp/np/isbn/9784843319376>
- 8 「新潮」第121巻第7号、2024年7月、P200
- 9 以下、掲載例
「三島由紀夫 全集未収録の随筆を確認 1947年の新聞に掲載」朝日新聞、2024年6月6日朝刊
「活字の海で 三島由紀夫 22歳の随筆を発掘」日本経済新聞、2024年6月29日朝刊
「新発掘 三島由紀夫・坂口安吾 全集未収録随筆」新潮、第121巻第7号、2024年7月
- 10 「新潮」第121巻第7号、2024年7月、P202
- 11 斎藤理生著「《資料紹介》『新夕刊』文藝記事目録（一九四七）」
阪大近代文学研究、23号、2025年
- 12 日本新聞協会編『別冊新聞研究 聴きとりでつづる新聞史』第12号、1981年5月
- 13 「社説 裁かれる『日本の生き方』」民報、1946年7月21日
- 14 吉田健二著『戦後改革期の政論新聞 —「民報」に集ったジャーナリストたち—』文化書房博文社、2002年、P62